琉球大学学術リポジトリ

6. 地域住民との係わり、地域社会の変化

メタデータ	言語: 出版者: 島袋純 公開日: 2012-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 芳春 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25061

VI.地域住民との係わり、地域社会の変化

宇栄原小学校校長　横山芳春

島袋：グラフが入ったコピーとそれから新聞の記事コピーについてです。新聞の記事の小と大があります。それから両面コピーの記事が今配られています。そしてこの前授業していただいた古我知さんのところから、授業の中で買い物ゲーム説明してくれていましたが、そのスタッフ養成講座に参加してほしいということでビラが来ています。買い物ゲームの指導者を養成するプログラムがあるそうです。それが末吉公園内の施設「みんみん」でやるそうなので、是非参加して下さい。そして、もう一つ今コピーしてもらっているのが、宇栄原小保護者アンケートのグラフです。先週来なかった人には総合計画、学習の時間の指導計画を配布しています。

今日でお招きするゲストスピーカーは最後になります。２回目ですが、宇栄原小学校校長の横山先生にまた来ていただきました。今日は、主にテーマを地域との繋がり、地域からどう、特に地域とどう関わって、地域がどう変わったかということについて話を中心にお願いしています。特に、保護者を通じて地域が変わっていくということになるかと思いますが、そのことを中心にお話していただこうと思っています。できれば質問の時間を30分あるいは40分くらいちょっと多めにもらって、それで、今までNPOの方々が話してきた中で、いろいろ見えてきたことで、逆に分からなくなってきたこと、いろいろあると思いますが、質問時間を設けることをお願いしてありますので、十分な回答が得られることかと思います。では、横山さん、２回目よろしくお願いします。

横山：校内の環境教育やるのがやっとの状態で、住民との関わりはどれぐらい進んでいるかどうか、苦しいところではありますができているところまでお話しするので、お聞き下さい。まず保護者との関わりですが、これはエコビジョン沖縄の代表者の古我知さんが説明したかもしれませんけども、本校は学習参加というのも進めています。学校は授業参観日ってあります。授業参観日もやりますけども、保護者達の学習参加も促していこうということで、学習参加日というのも設けています。保護者が、子ども達・教師達と一緒に学びあおう、という趣旨でます。学校が学びの共同体のセンターになるように、地域のセンターになっていくようにという、長期的なスパンで考えているところですが、環境教育も、こういった方針に則りながらやっているところです。買い物ゲームを例に挙げますと、買い物ゲームはレクチャーだったのですか、それともワークショップしましたか、できなかった、レクチャーですね、はい。内容を聞かれたかと思いますが、買い物ゲームを、二段階でワークショップ実施しています。第一段階は保護者のみなさんに呼びかけて、それと教師達、このワークショップを実際にする教師達です。該当する学年の教師達に事前学習としてワークショップ、買い物ゲームを一回します。その買い物ゲームを一回体験した先生達と保護者達が、二段階目のステップで子ども達に対して買い物ゲームを実施していく。保護者と教師がファシリテーターになって買い物ゲームを進めるということです。専門のNPOの人達を実際の授業の時間は後方支援にまわる。そういう形で保護者も教師もこの環境ゲームの中に組み込まれています。そういった形で保護者が中に入っていくということです。ここに今日来られている長田さんが映っていますけど、リサイクル運動市民の会・エコビジョン沖縄のスタッ

フのみなさんが保護者と教師に買い物ゲームの説明をしているところです。さっき資料がありましたけど、買い物ゲームのプログラムスタッフ募集きていますね。こういうものを、参加者は研修を受けてスタッフになっていくわけですが、にわかスタッフに本校の保護者も教師もなっていってそれで授業をするということです。もちろん NPO の専門のみなさんがバックアップしてくれるという形をとっているわけです。これが実際の子ども達と一緒に買い物ゲームをしているお母さん方です。ここにお一人、その後ろ、このへんにもいますが、かなりの数の、十数名ぐらいのお母さん達が買い物ゲームの進行役として活躍をしているところです。買い物ゲームをすることによって、後でお話ししますけども、自分達がいかに、買い物をする時にゴミをたくさん買っているかっていうのが分かったという感想を漏らされているお母さんもいました。

地域との関わり二つ目ですが、これはですね、ピザ窯を作っているところです。学校の中に窯を作っています。この人が PTA 会長さん。この人は本校の保護者です。仕事は、タイル職人です。専門です。このピザ窯もエネルギーの勉強をしようということで、作ろうとしているところです。エネルギーの勉強で言うと、今石油文明ですね。石油・石炭で電気をおこして、石油で車を走らせて、文明が成り立っているわけですが、こういった石油はあと 40 年で無くなってしまう。石炭も二百数十年で無くなる。おまけに使えば使うほど、これ化石燃料ですが、二酸化炭素が発生して地球温暖化に繋がるということで今は自然エネルギー、そういったものに切り替えていこうとしているわけですね。そういったエネルギーの勉強をしようということで、ピザ窯、薪割りをしてエネルギーの勉強をしようと。樹木は計画的に植林をして、燃料にしていく。これは二酸化炭素終始計算では 0 と計算されるのですね。そういうことも子ども達は理解していこうということです。ちなみにこの耐火レンガは、私は数年前に東風平エコクラブっていうクラブを東風平でやっていまして、沖縄銀行に助成金の申請をして 50 万円ほど貰いまして、耐火レンガを 400 個ぐらい九州から取り寄せました。東風平で 1 機作って、半分ぐらい 200 個ぐらい余っていたので私から学校に寄付をして、このように作っているところです。ピザ窯が完成して、去年の 7 月でしたが、PTA 祭りでピザをつくって、子ども達が食べているところです。実際は 10 月、去年の 10 月ぐらいに 3 回ほど自然エネルギーの環境教育 5 年生のクラスでやっています。燃料としている薪はどこから来るかというと、これも地域との関わりになるなと思っているのですが。3 年生が隣の海軍壕公園の自然観察会を環境教育でやっています。虫を探したり、植物を見に行ったり。私も安全管理もありますので、付き合って去年行ったら、海軍壕公園の事務所の前に立派な薪をたくさん積み上げられているんですね。これぐらいの太さの、これぐらいの長さ、ちょうどいい薪がこうたくさん積み上げられているわけです。海軍壕公園の所長さんに話を聞いたら、要するにこれはゴミだと。公園管理から出てくる伐採したゴミだと。それじゃあそのゴミ、隣の学校にいただけないかと、ピザ窯を作ったので燃料にしたいと相談したら、本校がゴミを持っていってくれるということで本当に喜んでくれて、定期的に隣の薪を貰っています。ゴミとして出せばゴミなのですが、使えば自然エネルギーになるということも子ども達は学んでいるわけです。

それから地域社会の変化、どのようなものが表れているか、保護者を中心にこれから少しお話します。PTA 祭りの様子、PTA の草刈り作業、環境部アースの会の活動。それから、紙上座談会というのも去年の 2 月 21 日にタイムス紙上でやりましたので、それも少しご紹介します。PTA がしているアンケート調査、それから卒業生のお話といったものをしたいと思います。

これも以前お見せしましたが、PTA 祭りの時に、平成 16 年度からゴミを極力出さない PTA 祭

りをしようということで、那覇市が貸し出している「エコフレンド号」を予約して借りてきて、使い捨ての食器はやめて、この車に積まれている使い回しの食器を利用しています。このようにして、PTA祭りもゴミを出さないようにしていこうということです。環境教育にも結びつきますし、また使い捨ての紙皿等を買わなくていいので、そのへんの出費もなくなるわけですね。一挙両得と、一石二鳥ということです。この「エコフレンド号」について少しお話をしたいと思います。私が市役所にいた頃、ゼロエミッション推進室室長をしていた頃、ここにも来てレクチャーをしたと思うのですが、アースの会の宮良さんですね。アースの会のほうが、私のセクションとは違うセクション、環境部のほうに、こういった移動型の食器洗浄器があると。これ環境教育にも使えるし、実際のゴミ減量にも結びつくと。新潟県で日本では最初に導入しておりました。そういったものを入れてはどうかと、那覇市でも導入してはどうかと、環境部のほうに提案していました。環境部のほうはいろんなことがあって断ったようですが、たまたまその要請文を私が見まして、宮良さんに連絡して、これおもしろいからやろうと。実は私は、これはドイツでやっているのは既に知っていました。ドイツで自治体ごとに、自治体によってはその自治体が所有している土地の中でイベントを行う時は、ゴミを出してはいけない。イベントでゴミを出してはいけないという条例を定めています。条例を定めてこういった車が登場してきます。何回かやっているうちに、これはなかなかいいと。ハノーヴァー万博もゴミを出さない万博をしようということで、この手の、使い回しの食器を使い出し、ハノーヴァー万博で大成功したんですね。それから、ドイツはサッカーが盛んですけども、サッカー場でも使い捨ての紙コップはやめようと。ビールなんかよく飲みますけど、使い捨ての紙コップはやめよう、使い回しにしようと。その時少しだけ議論になったのが、ビンだと危ないな。ガラスだと興奮して投げたら危ない、ということでプラスティックの使い回しのコップになったそうです。そういうふうにドイツではどんどんどんどん広まって、とうとうこういう使い回しの食器を、提供していく企業が出てきました。その企業は大繁盛しているんですね、実は、それは条例があって、ゴミを出すイベントをしてはいけないというものが根底にあってそういう企業が活躍すると、要するに商売になるということです。そういうことも知っていましたので宮良さんがこういう提案をしてきた時には、いいなと思って、すぐに私も室長で権限があったのでゼロエミッション室の予算を使って、本課の一人の職員と、それと宮良さんに、新潟に調べに行ってもらい、調査結果を報告してもらって、それをまとめてやってみようと、いう提案をして。それから時間はかかりましたが、結局、買い取るとまたお金がかかるので、これは実はリースです。車屋、自動車産業に、注文していろいろ要求をしていろんなものをくっつけてもらって、リースをしています。それを導入して、最終的にやるか、やらないか、を決める時に、やはりこれを運営する人が、上手く運営していかないと広まらないんですよね、環境教育にも結びつかない、ということで、アースの会の宮良さん達に那覇市がこれを導入したら宮良さん達は運営をしてくれるかどうか、ってかけあいました。言い出しっぺだからやりましょう、ということになって宮良さん達が今これを運営しているわけです。そういったいきさつがあったのですが、私が平成16年度に、宇栄原小学校に行った時に、保護者たちにいいものがあるよと紹介してPTA祭りで、平成16年度から使っているところです。またPTAの影響ですが、平成16年度後半ぐらいからだったと思いますが、年何回か学校ではPTA作業として草刈り作業をしますが、すごい草が出てきます。これは使い回しの布袋を50枚、PTAがつくってくれて、これに入れては運んできて、堆肥にするということをしています。それまでは、大き

なビニール袋を100枚、用意していたので、100枚以上ゴミとして出ていったわけですね。ゴミは増える、ビニール袋は石油製品ですから石油も使ってしまうと、こういうことがあったのでこういう使い回しの袋をつくってくれました。これは全くPTAの自主的な活動です。私から何にも提案しませんでしたが、保護者のほうが、ある日突然50枚の布袋をつくってきてくれました。これも地域の関わりの一つかなと思います。この草を刈った後は、地域の外には出してないです。完全に学校の中で堆肥にして教材園等で使っています。それから環境部アースの会、PTAのみなさんは、平成16年環境教育を始めてすぐに、保護者もやらないといけないという自覚が出てきて、アースの会をつくって、リサイクルプラザに勉強に行って、マイバック・マイカップ・マイお箸を持ってみませんかとか、風呂敷の復建ですね、ゴミの行方とかを調べて正面の昇降口にある壁に、貼り出して環境教育の一端を担いだした、ということです。

この環境部アースの会のみなさんが、平成18年10月に、保護者対象のアンケートをとってくれました。開票率はたしか60%ぐらいだったかなと思いますが、アンケート結果があります。一番目、自然環境が壊れてきていると感じることがありますか、では89%、9割の人が、そう思うと答えております。二番目に、中々いい評価が出たなと思っているのですが、子ども達が学校で環境教育を習いはじめてから家での変化はありましたか。はい、と答えたのが9割です。9割の人の子ども達が変わってきたと答えています。水を大切に使うようになりましたか、は89%。電気をこまめに消していますか、は90%。電気製品のコンセントはこまめに抜いていますか、が約5割です。それから無駄になる買い物はしていませんか、は7割。食事を作りすぎて捨てていませんか、は6割が捨てていないと。PTAのみなさんちょっと残念だったなと言っていたのが、買い物をする時マイバックを使っていますか、40%。10人に4人の人がマイバックを使っていますけど、他と比べると、数値が低くなっているのでアースの会のみなさんガッカリしたのですが、考えてみれば、10人に4人がマイバック使っているっていうのは非常に高い数値じゃないかなと思います。スーパーに行って、ご覧になったらいいと思うのですが、10人に4人が、マイバック使っているかどうか、確認されたらいいと思いますが決して低い数値ではないですよというふうに、アースの会のみなさんを励ましているところです。洗剤などの容器は使い捨てずに詰め替えて使っていますか、86%がそのようにしていると。近いところへは車を使わずに歩くようにしていますか、54%の人がそうしていると。これもけっこう高いと思います。私達は車に慣れてしまって、また沖縄暑いのですぐ車乗りますね、近くても。でもこの50%の人が、歩くようにしていると答えていると。エコドライブをしているかどうか、急発進・急ブレーキをしないようにするとか、アイドリングはしないように気をつけている、といったものも高い数値で回答が出ています。また、油をそのまま捨てていませんかは、捨ててないという人が96%。洗剤を大量に使いすぎていませんか、いないという人が92%。これもかなり高い数値で出ています。那覇市の行政がこういう調査をしてないかなとホームページで調べてみたのですが、2年に一回市民意識調査をやりますが、環境で、こういう詳しい調査はないようでした。少なくとも市民意識調査ではやってないので、本校の保護者達と一般のほうと、比較することができないのでどうかなとは思うのですが、私としては感覚としてはかなり高い数値で環境にいい活動を保護者のみなさんやっていると思います。保護者にはいい影響がでていると考えているところです。

環境部アースの会の活動をどんなものかまとめております。環境講演会、例えば長田さんの紹介で遠藤さんという方ですが、沈みゆくツバル、南太平洋の島だったと思いますが、地球温暖化

で海水面、海水が膨張して、島がどんどんどんどん海水が浸水してきて、そこを調べている遠藤さんが、本校の子ども達と、そして保護者のみなさん二回に分けて、講演会をしてくださいました。これもPTAアースの会の活動です。それから、アースの会のみなさんにお願いして、廃油、食用廃油、てんぷら油を持ち寄って石けんづくりのワークショップもしています。先ほどのアンケート調査を実施して、解析をして、全保護者に配布・広報活動をしています。環境にやさしいイベントということで、先ほど紹介したPTA祭りですね、それから、環境にやさしいイベントPTA祭りも、こういった使い回しの食器利用ともう一つは、環境のブースをつくって環境クイズというものを子ども達にやっていく。こういうのも去年ありました。それから、ゴミを出さない草刈り作業、先ほど申し上げたとおりです。こういったことをしているところです。

保護者から少し離れて今度は行政のほうです。那覇市教育委員会との関わりを申し上げます。本校が学校版ISO14001に取り組みだして、学校でこういうことを始めてもどこかの機関がISOを認証してくれないといけないわけですね。審査をして合格とか不合格と。合格であれば、学校版ISOを認証するというこの証書を発行してもらわないといけないのですが、始めた時は、発行先がなかったので、教育委員会のほうにも、いろいろとお話をして教育委員会もその時は、環境教育の推進計画を作成しているところで、その中にですね、学校版ISO制度も盛り込んでいくということを決めてくれました。そういったことを報道しているのが2006年、4年かな、10月8日、2004年10月8日琉球新報で報道されました。市教委も学校版ISO制度をつくってくれた。これも市教委と学校の関わりかなと思っています。教育委員会の制度に則って、学校版ISOの審査をやっているところです。これも地域・行政との関わりの中から実現しています。こちらが審査員のみなさんですが、この人は、当時那覇市環境部の主幹です、課長クラスですね。私の以前の職場の同僚です。この人は沖縄大学の職員でした。6年生の学校版ISOの1年目の時に、いろいろプログラムをつくってくれて、ほとんど毎週、学校に来てくれて先生達と一緒に、ISOの構築をしてくれた人です。現在は、京都にある大学に行って、大学院で勉強をしておられます。来年ぐらい帰ってくると思います。この人は那覇市環境部環境政策課の課長だった人です、他に異動していますが。この女性は、那覇市教育委員会の学校教育課の指導主事です。環境も担当しているということで来てくれました。もともとは学校の先生です。教育委員会から異動したら、学校の先生にまた戻ります。中学校の先生です。この人達が審査員になって子ども達が発表して、その発表に対して審査員のほうから質問をして答えていく、といった発表会を審査会に変えたわけです。地域との関わりの中からこういった審査会が成立しているということと思います。

学校版ISOの展望から、地域との関わりを見ていくとこうなるのかなと思うのが、環境教育を受けた子ども達が、環境のリトルティーチャーになっていく。子ども達は、家に帰って保護者を教育してくれるんですね。非常に手厳しいです。電気つけっぱなしにしていたら子どもは怒ります。水の無駄使いとか、例えば調理する時も、野菜クズをたくさん出すような調理をしていると、お母さんに子どもが怒りだす。買い物に行く時に、お母さんマイバックを持っているか、と子どもが言うぐらいになっていると。いろいろと、口うるさいリトルティーチャーに子ども達がなっていると。保護者達は非常に敏感ですので、どんどんどんどん保護者が変わっていく。変わった結果先ほどのアンケート調査のような結果に結びついている。このような構図です。家庭がこのように変わっていくと地域が変わっていくということになるわけです。子どもが変わると地域が変わる、ということかなと考えています。先ほど言いました那覇市教育委員会の制度ですね、あ

あいうふうに那覇市教育委員会で制度ができると、宇栄原小学校以外の学校でも学校版ISO14001に取り組みやすくなります。なかなか他の学校には波及してないですが、制度としてはできたということです。本校が始めて、それにすぐに反応したのが、お隣の豊見城市の長嶺中学校。とても素晴らしい技術の先生がいて、その人が学校版ISOをやってみよう、ということになって平成17年度に始めています。17年度の4月に、私に来てくれと言われて、1年生の全教職員が集まった中で、宇栄原小学校の学校版ISOのやっていることを説明しました。非常にあの優秀な方々で、1年で、中学校1年生で学校版ISOを構築しました。同時に、NPOの人達もどっと入っていって、豊見城市の教育委員会も動かして、豊見城市も学校版ISO制度をつくった。このようなことが起こっています。那覇市内の学校にも波及してほしいなと思っています。他にこういうことが起これば、その地域でまた子どもから家庭、家庭から地域へと、子どもが変わって地域が変わるという現象が起こってくるのではないかと、期待しているところです。このようなことが起こりだすと、学校が環境活動の拠点になってくると考えています。

研究の成果と課題

成果	課題
①NPO・保護者等の授業参加で知の側面成長 ②G学習、異学年交流で心の側面が育つ ③授業と行事をつなぐ実践ができた:エコ修学旅行 ④学校版ISOを全学で実践、社会貢献の態度が養われだした	①学校版ISOの数値目標の設定 ②地域・家庭への波及 ③日々の授業のねらいと評価基準を明確にする

島袋先生から、教師のほうのことも少し質問が出ておりましたので、教師の関わりについて少しお話したいと思います。教師の関わりですが、現在の教師は昔もそうですけど、環境教育の訓練を受けているわけではないです。教員免許を取る時に環境教育が必修ではないですね。だから、大半の先生達、99%は環境の教育を受けてないわけです。従って、年間を通して環境教育をやっていくということになっても、どうしていいか分からないというのがまず前提にあります。そういった状態で、必要で環境教育をやっているわけですから、どうしているかというと、NPOのみなさんにバックアップしてもらっています。そこで重要になるのが、NPOのスタッフと教師の関わり方がポイントになるのかなと思います。現在の5年生ですが、昨日から、5年生の方の環境教育がやっとスタートしました。アースの会の宮良さん達4人が、昨日午前中ずっと来ていました。1時間目に5年生全員に、なぜ環境教育を行うのかとか、基本的なことのレクチャーをして、2時間目、3時間目、4時間目は、それぞれ1クラスずつ1時間で、マイバックの話をしていました。ふろしきを持ってきて、ふろしきでバックをつくる方法とか。その前提にあるのはレジ袋です。レジ袋が年間何十億個使われている、それは石油を、重油を日本は輸入しているわけですが、なんと重油輸入の日本の1日分をこのレジ袋に費やしているというような説明もしていましたが、そういったレジ袋を使わずに、断る。そしてマイバックを持つとか、またワークショップではふろしきもいいもんだよ、ということで、ふろしきで30秒でつくれるバックとか、いろんなワークショップをしておりましたが、昨日から始まったところです。この授業を観ていて先生達もいいなと思ったのは、最初に学年の主任が、子ども達とNPOのみなさんの前で始ま

りのあいさつをしていましたが「環境教育は教科書がありません。教科書がないということは環境教育は教科の一つではないということです。教科書がないので私達先生も環境のことはよく分かりません」と言っていました。なかなか子ども達に、教師が分かりませんと言うことはないんですね。そこまで先生達が心を開きだしたのかなと思って喜んでいるのですが、私達先生も実は環境のことがよく分からないと、NPO の人達に来てもらって授業をしてもらっていると。先生達もみなさんと一緒に環境のことをこれから1年学んでいきたいです、というふうにこの学年主任が言ったんですね。素晴らしい先生だなと思いました。その NPO と教師の関わりの一つとして、NPO から子どもと一緒に環境のことを学んでいくというのが、一つの今行わなければならないことかなと考えているところです。

学校で環境教育を充実させるには、ということを少し考えてみました。大きな観点から言うと、環境教育を必修化した方がいいと思います。その為に、教員養成で環境教育を必修化させる。実はスウェーデンなんかは、もうすでにこれをやっているわけです。教員免許を取るときは環境教育の単位を取っとかなきゃいけない。なぜかというと、スウェーデンでは環境教育は必修科目になっているから、ということです。教師達も環境の授業を法律に基づいて、しないといけないわけです。当然、環境のことを勉強した人達が先生になっていく時代が来るのだろうと思っていますが、日本の現状見ていると、環境教育の必修化より先に、英語教育、小学校の英語教育の必修化の方が先のようですが、大きな視点、観点からいえばこういうことが必要かなと思っています。身近な視点から言うと、NPO が教師の役割をプログラム化する。先ほど申し上げたエコビジョン沖縄の買い物ゲームのように、先生達をインストラクターとして育てる、といったプログラムをつくって、学校に入ってくるということになると、先生達は自然に、ああいう楽しいゲームを通して環境の学びができて、インストラクターの卵のような形にもなっていく。この3年間見ていると、3年間の買い物ゲームの授業を受けている先生が1人いました。臨時の先生だったのですが、今は城北小学校の本務教員になっていますが、その先生は、買い物ゲームを普通にできるようになっていました。先生達の役割をプログラムの中に入れていくプログラムがたくさんできてくれば先生達の成長も著しくなるだろうなと。また先生も関わりやすくなると思っています。NPO のみなさんに、ちょくちょくこういうことをお願いしているところです。NPO と教師の役割分担も考えてみました。現在、那覇市は開発指定区ということで英語教育を4年やっています。小学校1年から6年生まで。どの時間帯にやっているかというと、総合的な学習の時間が、高学年では例えば105時間ぐらいあるんですが、その内の30時間ぐらいを英語学習にあてています。1年生から6年生まで全部英語学習が入っていますが、この英語学習のシステム、環境教育にも参考になるんですね。どういうものかというと、AET という先生が来ます。これはアシスタント・イングリッシュ・ティーチャーの略だと思いますが、AET、外国人です。イングリッシュのネイティブスピーカーを雇って、学校に来る。宇栄原小学校でいえば、フィリピンで英語の先生をやっていた女性が授業をやっていきます。この授業は担任の先生とその AET が分担しながら英語の授業をしていきます。教育委員会の方針としては、4年目に入っているので、学級担任が主体になって外国人アシスタントは、これをバックアップしていく方法をとって下さいということになっています。環境教育にもこういう形ができないものかと思うんですね。そういった英語教育を参考にしていくと学級担任の現在の、現時点での役割といったら授業の、環境教育の授業の進行をしていく。また、子ども達と同じように学ぶ人間である。学ぶ存在というモデルになってい

く。誰のモデルか、といったら子ども達のモデルになっていく。こういった役割が現在必要ではないかと思っています。NPO の方は専門的な部分を担っていく、といった形がいいのかなと考えているところです。役割分担の課題ですが、NPO のみなさんとの調整時間が取りにくい。先生達も音楽、中学年・高学年以上は音楽と理科は専門の先生がいますが、それ以外の教科の授業は全部やらないといけないわけですね。1時間目から5時間目か、6時間目ぐらいまで。その準備というのがいつも必要なわけで、とても忙しい。それで NPO のみなさんとなかなか調整の時間がとりづらい、というのがあります。そして二つ目にプログラムの理解がなかなか進まない。やはりこれは専門的な知識が必要なので、そういった意味で、プログラムの理解にも困難なところがある。NPO の方々にとっては、頻繁には学校に来れないわけです。例えば、十分な謝礼金を用意して NPO のみなさんに呼びかければ可能性は広がりますが、なかなかです。そんなお金をたくさん獲得できるわけではありませんし、行政から入ってくるお金は0ですから学校自ら稼がないといけない。そういうこともあって、頻繁に来てくれとは学校側からは言いにくいわけです。NPO のみなさんが、環境教育の NPO のみなさんが、英語講師のように市に雇用されていると、非常にやりやすいなぁと思います。決まった時間、雇用しているわけですから、その時間帯で調整もできるわけです。市が雇用している状況でもないなかで、なんとか環境教育を進めているということです。課題克服の一つは、先ほど申し上げたとおりです。NPO のプログラムに教師の役割を入れ込んでいく。例は買い物ゲーム。最近はアースの会のほうも教師の役割を入れていくプログラムづくりを始めました、という連絡も受けています。これが、今年、定年退職された先生が、買い物ゲームでファシリテーターとしてゴミの行方をイラストを使って説明しているところです。どこでゴミ処理にお金がかかっているのかを教師が説明しているところです。この人はさっき言った城北小学校の本務職員になっている人ですが、本校で3年間臨時をしていました。子ども達から、ゴミの減らし方を出してもらってそれを分類して、説明をしているところですが、もう十分買い物ゲームを進められる実力をもっていました。教師がファシリテーターになっていく、といったプログラムがたくさん出てくればいいなと考えています。

資料として、紙上座談会を配っています。宇栄原小学校の座談会を沖縄タイムスが組んでくれました。宇栄原小学校の環境教育座談会から地域の関係が見えるものについて少しお話したいと思います。座談会の一番上段の宮良さんの発言のところです。「運営委託を受けている那覇市リサイクルプラザによく子どもが見学に来る。毎年同じ先生が連れてくる所もあるが、ほとんどは1回限りの学習で終わり。本当に内容が伝わっているのかな、と感じることも多い。学校に入り込んで継続してできないかと以前から考えていた。でも、やっぱり学校は敷居が高い。先生は外部の人間に入ってきてほしくないのかなあと…」こういう発言をされています。引き続き宮良さん「先生が忙しいのは分かる。だから余裕がなくてできない部分は NPO に任せてくれたらいいと思う」同じく宮良さん「学校は何でもボランティアでやらせようとするが…」このボランティアというのは無償です。「無償ボランティアでやらせようとするが、予算面の措置があれば、NPO も出やすくなると思う」といった学校、先生達との関係をお話なさっています。一番下の段、知名さんっていう人、これは本校の保護者です。「ゲームでは、買い物ゲームでは最初は主婦感覚で、安く買おうとした。でも、実はゴミも買っていて、その処理費用もかかっていることを知り、驚いた。考えたこともなかったごみのコストをゲームで実感した。生活の中で『無駄なものを買わない』『マイバック使用』を意識するようになった」。引き続き知名さん「息子と一緒に買い物に

行くと、必ず『マイバック持っている？』と聞いてくる。友人は子どもがスーパーでかごの中をのぞき、ごみが出ない買い方かどうかチェックするという。子どもの方が大人をリードし、いい波及効果が出ていると思う」。下のほうの引き続き上段の知名さん「子どもの影響で、家庭でもごみ分別の意識が高まった。ごみを減らすにはどうすればいいかを、親も子も一緒に考えるようになった。フリーマーケットにも参加し、子どもに自分で出品させたが、不要になった絵本やカードをほかの子が必要とすることを喜んでいた。自分が大事に使っていけばごみにならず、ほかの人が再利用できることを学んだようだ」というふうに発言されています。３段目の左側の方、もう一度知名さんの発言。「いくら学校で勉強しても、家庭に帰ったら親やほかの大人達がまったくやっていないという状態では、子どもたちは戸惑うと思う。現状は、たばこやごみのポイ捨てがとても多い。子どもだけじゃなくて、周りの大人が一緒に考えていかないといけない」と、このような感想を保護者の方が述べています。これも地域への波及、あるいは地域との関係をはかり知る貴重な発言かなと、考えているところです。

以上です。今日は地域との関わりで、現段階で気づいているところをこのようにまとめてきました。あと 35、6 分質疑の時間をとれたかと思いますよろしくお願いします。

島袋：どうもありがとうございます。２度も来ていただいて、しかもボランティアです。いろいろ話していただきました。今日は特に地域との関わりと、それともう一点。以前、学校の先生方の関わりが見えてこないということで、そういった質問、疑問が多いということをお伝えしてあったので、こちらの意向をくみとって教師との関わりの部分を発表、報告していただきました。それで、主にこの二つの点で、今回は、中心にお話を聞いていきたいと思います。最初にみなさんから質問が多かった、特に先生方との関係について、聞いて、それから次に地域との関わりについてお聞きしたいと思います。学校の先生方の問題について何か質問ありますか。今日の報告でかなり分かりましたか。

横山：先生への環境教育への関わり方は、大きく分けて３つパターンが、現在あるとみています。1 つは、今日少し詳しく説明しましたけども、NPO の環境教育のプログラムの中に組み込まれていて環境教育を自らやっていく。これは NPO の優れたプログラムがあってこそできる話です。そういうパターンが一つです。環境教育のインストラクターまがいのものまでなっていく、というのが 1 つのパターンです。2 つ目は、アースの会のみなさんがやってくれているかなりの部分を、ほとんどの部分を NPO の人達が実施してくれる。教師達は、最初のあいさつと終わりぐらい、後は一緒にうまくいけば子どもと学んでいる。そういう NPO の人達がほとんど主体になって、先生達は見学というような形になっているのが 2 つ目のパターンです。3 つ目のパターンは学校版 ISO の取り組みをしている 6 学年ですが、もちろん NPO の人達が相談役になってくれていますが、実際に進めていっているのは、先生達。学校版 ISO をやっている 6 年生のほうは先生達が授業を自らやっている。NPO のみなさんの相談、バックアップを受けながらですね、自ら進めている。こういう 3 パターンが今あると思っています。本校に、この 3 パターンとも存在しているということだと思います。

島袋：はい、分かりました。前からの疑問で、ワークショップの中でも疑問が出てきたのですが、

先生方に対する研修っていうか、環境教育を実際にできていけるようなファシリテーターになっていけるような、先生方への教育、先生方の能力開発というか、それは、期間をどうやって設けてやっているのか、っていうことですね。特に環境教育に関して。

横山：はい。環境教育については、春休みを利用したり、それから夏休みを利用して、基本的なところを学習してもらおうと思って、校内研修を組んでいます。もう明日から夏休みですので、来週の月曜日は琉球大学の伊波美智子教授ですね。以前ゼロエミッションで一緒に仕事をしていた先生ですけど。伊波美智子先生に来てもらって、「持続可能な社会」というテーマで、環境講座を開いてもらいます。昨年度の春休みは、こっちにおられる長田さんとそれからエコビジョン沖縄の藤井晴彦さんに来てもらったり。裏の山を歩きに行ったりですね。長田さんは地球温暖化の話していただいたんですかね。いろんな道具を持ってきてもらって。それからさっき出た、地球温暖化でウミガメが、ツバルが沈んでいく講演会とか。こういうのも先生に受けてもらったり。それから、先生達自ら環境講座を夏休み利用して受けに行っている人達もいます。以前「みんみん」で開催されたネイチャーゲームだったかな、研修を受けに行っていました。自らやっている人、それから少しは講座を開いていますけど。教師が主体にならないと、いくら講座を開いても学びにはならないですが、少しはやっているという状態です。環境ばかりに打ち込めると、それはいろんなことができますが、環境教育も含めて授業というのが先生の仕事ですので、基礎科目である国語とか算数、こういった授業の力もつけていかなければいけないわけです。理科やら社会関係、それから音楽、図工、体育、いろいろあります。そういった、全ての授業で、授業研究を本校かなりやっています。その部分を含めて、環境だけにこう集中することはできない状態です。

島袋：特にファシリテーションっていう場合に、唯一の正解が決まっていなくて、子ども達から、自分達が考える、自分達が持っているそのいろんな経験とか、学びの中から答えを引き出して、見出していく、それを助ける作業ですよね。これってけっこう難しくて、今までの教師の養成っていうのは、基本的に正しい答えをいかにして出すかっていうのがあったのですが、そういったファシリテーション能力の向上っていうことに関しては、何かしら特別な意識っていうことをこう先生達にも。

横山：2 つやっています。1 つはファシリテーションの能力というものは、何も環境だけにかかっていることではないですよね。子ども達がもっているものを引き出し、それを広げていくというのが教師の仕事です。それは国語、算数、理科、音楽、体育でも、一緒の話であって、そのへんは、私達がかなり力を入れて授業研究をやっているところです。例えば詩の授業を通して、研究授業はやりやすいですね。何故かというと、一発ものですから。外部から来てもらっている、そこにも紹介されていますが、宮城教育大学の前学長の横須賀薫先生に授業をしてもらったり、また授業をやっている所に介入してもらったりしながら。今一番の課題は一子ども達の中の会話をどう生み出していくかが、本校の大きなテーマになっているんですね。先ほどおっしゃったように、授業でまかりまちがえばこうなるだろう、というのは一方通行です。教師と一人の子ども。教師と一人の子どもでこう質問して、答えを言って、それで終わり。一方通行ですよ、1 対 1 の

しかも一方通行。双方向の会話にはなってない。そういった一方通行の対話もだいたいはクラスの2割くらいしかやってない。他の子はほとんど逃避している。そういう授業っていうのはとても多いですが、それでは良くないだろうと。本校は全員の可能性を引き出そうという教育目標を3年前からつくっていますから、すべての子どもの可能性を引き出そうと。子ども間の対話を生み出す努力を授業研究で一生懸命やっているわけです。子どもがつぶやいてるものを他の子どもと、こう繋いでやったりですね。授業研究をやっていて非常におもしろいのが、横須賀薫先生がよく1年前から私達の学校で言ってるんですが、劇的な対立を作り出そうとするんですね。詩の解釈っていうのは正解はないわけで、正解がある部分もありますけど。対立点を生み出していく授業を横須賀先生がやるんですね。例えば『みみこのどくりつ』っていう山之内獏の詩がありますが、ちっちゃな女の子が大きな下駄はいて、何かものを取りに行く、詩ですけど、その詩の中で会話があるわけです。子ども達はその詩の解釈をやってると、ほとんどの子ども達は、お兄ちゃんと会話をしていると思っていますですが、ずっとそこまでいって子ども達同士で盛り上がっているわけですが。ある時点で横須賀薫先生がそれはお兄ちゃんじゃないと。お父さんだと思う、というふうにこうひっくり返すんですね、子ども達を。子ども達は呆然とするわけですよ。そこから横須賀先生と子ども達の対立が始まるわけです。子ども達に言わせるんです、どうしてお兄ちゃんか論拠を示させるわけです。全部それを潰していきます。横須賀先生が考えているどうしてお父さんかっていうのは、詩の中にこう書かれている、というのを、どんどんどんどんこう議論していくわけですね。子ども達はそれで、参りましたって言ってしょげるんじゃなくて、気持ちが良かった、って感想文に出てくるんですね。自分達はこう思っていたけども、横須賀先生が最後の最後で違うと言って説明したら、自分もやっぱり違うなと思ったと。とても気持ち良かったって書いてるんですね、分からないことが分かって。そういったものを子ども達同士で対立する時は対立するようにどんどん進めていくし、子どもの中で対立が起きない時は教師が対立させるんですね。その分、子どもよりも優れた教材解釈をしてないとそれができないわけで、教師はそれがしんどいわけなんだけど。これは一斉授業の中でもできるわけですね。ワークショップみたいに4、5人のグループをつくらなくてもできるわけで、一斉授業の中でもそういったコミュニケーションができるような力を本校の教師はつけていこうということでかなり苦労しているわけです。

もう1つは、ワークショップも何度かやっています。先生達に私は100回ぐらいワークショップやっています。先生達と一緒にワークショップの研修もいろんな所に受けに行って。環境のワークショップをやったり、それから2年前は2学期制移行ということになってきたので、3学期制と2学期制、それぞれのメリット・デメリットを出しながら、デメリットはどう解決したらいいのかっていうワークショップを先生達とやってきました。環境のワークショップについては、500人の宇宙船というスウェーデンのナチュラルステップが開発したワークショップを、本校では9回ぐらいやっていますが、先生達も興味のある人はワークショップの手法を覚えています。去年移動していった、沖縄県教育委員会の生涯学習課に異動していった先生は初任者研修の講師になったので、このワークショップをやりたいと、テーマは環境じゃないですよ。そのワークショップを初任者研修でやりました、というメールも貰いました。ワークショップも非常に優れているなと思うんですね。子ども達の意見をそれぞれ引き出していく。このワークショップも小学校の授業の中で、今は環境でたまにやっていますが、他の授業の中でも取り入れられないかなと

思っています。東京大学の佐藤学教授は中学校等でこういった4人グループのワークショップをよくやっています。何冊かの本にこのワークショップの様子を紹介していますが、ワークショップが成立する時と、やめなければいけないことまでも彼は書いていました。子ども間の会話が成立する、意見を引き出すというワークショップというのも非常に優れているなと思っているところです。

島袋：分かりました。何か質問ないですか。

横山：授業でこないだ沖縄県総合教育センターに半年研修で行っている職員がいまして、教師が。体育が好きな人で。一週間ほど前に、研究授業ということで本校に戻ってきて、彼の担任クラスである2年生で体育の授業やったんですね。この人は長嶺さんといって、那覇市久茂地に長嶺道場ってありますけど、空手道場ですね、そこの息子さんで空手にかなり興味があって。空手遊びを体育の授業に取り入れたいプログラムをつくってきました。45分の授業でとてもおもしろかったのは、最後の15分のクライマックスで、彼はやっぱり本校の教員ですので、子ども同士の対話をどうつくっていくか、っていうのが授業のテーマでもあるんですね。彼がやったのは、体育の時間ですが「断崖絶壁」というゲームをしたんですね、最後の15で。これはどういうものかというと、体育館のフロアと舞台がありますね。その落差があるわけですが、その落差にさらに体育館に台がたくさんあって、その台を積み上げて、その上に大きなマットを、棒高跳びで使うようなマットを、こうあてがって、安全対策をして、2mぐらいの断崖絶壁をつくったわけです。これは小学校2年生にとっては本当に断崖絶壁です。これを上らせるんですね。おもしろいのは見ていたら、子ども達はこんなの大好きですから飛びついていくわけです。どんどんどんどん。2mなんか上れるわけないですよね。飛びついてはズルズル、ズルズルと落ちているわけです。ずっと見ていると、ある子が、友達が飛びついているお尻を押しだしたんですね、ずっと。なるほどと思って、要するにこれは会話の一つですね、子ども同士の対話ですよ、これは。協力し合って乗せようとしている。教師がそこでやっている役割は何かというと、それするグループを見つけてちょっとしてから、「あーお尻を押している子がいます。いいですねー」って、こう他の子達に知らせていくんですね。これはいい方法だねっていうのを何気なく知らせていく。やっぱりお尻を押す子が何人も出てくるんですね。やるけどもまだこう上れないわけです。膠着状態になるんです、上れないんです、それでも。そうすると、これ以上は進まないな、と教師が判断をした時は教師がちょっと横やりを入れるんですね。一人が馬になってみるのもいいんじゃない、と言うんですね。そうすると、誰か馬になるんですね。馬の上に乗って、飛びついて、下から押すんですね。これで上れる子が出てきたんですね。要するに、子ども同士で対話させて協力させあって、子ども達が自発的にできている時はそれでどんどんやらせて、膠着状態、止まった時は教師が何か言ってやるんですよ。それが教師の役割だと思うのですが。それで上る子が出てきて、最後は上ってない子が3人残ったんですね。そうしたら、教師が一つ発問するわけです。「3人残っています、みなさん頑張りましょう」って言ったら子ども達盛り上がるわけですよ。この3人を何とか上らせようってことで。馬になっている子、押す子、上から引っ張りあげる子。引っ張りあげる子はずり落ちていく。その後ろからまた引っ張っている子もいるんですね。全員がこう協力しながら、要するに全員が対話しながら全員を上まで乗せてあげる。こういう授業をしてい

て見事だなと思いました。体育の授業でもいかに対話をつくっていくか、協力させていくかっていうことを授業では大事だなと。見事に本校が、大きな課題としているものをこう克服した授業だなと思いました。環境とは関係ないですが。

学生：先ほど先生の関わりのところで画面にも出ていたのですが、先生達はやっぱり環境教育の訓練を受けてないから、何していいか分からないっていうのもあるし、たぶん意識的にもあんまり、なんて言うんですかね、環境教育を意識してなかったと思うのですが、横山さんが赴任してきていろいろ NPO が入ってきて授業したりした中で、徐々に先生の何か意識が変わった点とかっていうのは何かありますか。例えば、総合的な学習の時間は他の教科とも横断的に関連づけてやるっていうふうに聞いたんですけど、社会でも自分達がやっている環境の授業と結びつけてやったりとか、あと理科とリンクさせてやったりとかっていう、変化がみられるのはありますか。

横山：授業を私も時々のぞきに行くけども、しょっちゅう行けないのでよく分かりませんが、理科の授業と関連させてやっているとか。例えば、去年見ていたら理科の先生が、環境教育と連携したような取り組みをしていて、例えば自分のバイクのエンジンかけて、排気ガスを袋に詰めて。重さを量ったり、どれぐらいの炭素量があるか、っていうふうなことを理科の授業でやって、環境教育と結んでいたり。それから、理科や生活科の中で植物を育てる授業ってけっこう多いんですね。そういう植物と環境の問題をくっつけて、授業をやったりと。まぁちょくちょくやっているようではあります。今年は理科専科の先生がバイオエタノールのあの研究を子ども達でできんかなと言っています。伊江島出身の人で、沖縄県では伊江島と宮古島でサトウキビから、ガソリン代替燃料をつくっていますね。要するにサトウキビから車を走らせる燃料をつくるわけですけどね、ブラジルなんかではよくやっています。そういったものを子ども達現場に行って見てもらって、自然エネルギーの学習、調べ学習まで発展させることはできないかなって言って、いろいろ検討中です。その時に、那覇の小禄から伊江島まで行くのに、バス使わないといけないんですよね。船乗らないといけないわけですよ。そうすると、旅費がいるわけです。10 万ぐらいあったらなんとかなるかなと思って、今年度も助成金をいろいろ出していますが、なかなか今年は取りにくいのしか残ってなくて、なかなかそれが取れなくて。旅費が工面できないところがあるので夏休みに単発で何名かが行くかなというような話もしていましたけど。理科の先生がそういうことを今一生懸命言っています。自然エネルギーの学習を 5 年生でしようっていうことを。そういうものもあります。

島袋：ようするに日本の今までの教育システムというのは、教科の内容は全て文部科学省が決めて、そして正解のあるような教育プログラムがあって、それをどういう形で教えていくか。それで、教え伝える内容、知識の到達目標、最終的な答えは明示されていても、その教育のプロセスというのはあんまり重視しているようには思えないです。しかし、こういったワークショップ型の授業というのは、正しい答えっていうのは、最終的な答えっていうのはあまり問題ではなくて、プロセスが中心ですよね。答えを導いていく、その答えを探し出していく能力をつけることが重要ですよね。今少し考えているのは、ようするに学校の現場において、職員会議の権限がなくなって、それからまた教育関係の法律の関係で、管理が非常に厳しくなっていますね。そして、縦

の関係が非常に強くなっている中で、本当に教員の自発性を自分達の意見を言って、自分達で環境教育っていうのをやらないといけないっていうことで、やり出すようなことができる環境にあるのかどうか。それとも、校長先生が環境教育をやれ、やりなさいっていうことで校長の裁量・権限が拡大しているので、それでやりなさいっていうことで仕方なくやりだしているのか。これはやれと言われればやれるというようなものではないとは思うのですが。つまり教員の自発性も必要になると思います。それがどう上手くバランスをとって、横山先生だから環境教育、やれって言われたからやっているんじゃなくて、本当に自ら環境教育が必要だから、環境教育やらなければと。それは自分達のおそらく話し合いの中で、自分達の中でプログラムを開発していく、関わっていく。それから学校全体を変えていこうと雰囲気ができて来る必要がある。文部科学省の指示通りだけでなくて、教員が自分達で独自の教育のプロセスを考えていかねばいけないんだという自覚、そういった話し合いの中で合意がつくられていかない限り、学校って変わっていかない、というイメージがあるんですが、そういった面での教師同士の話し合い、それによる学校の教育の質の変化みたいな、そういう状況はどうですか。

横山：聞いてて、かなり理想化しているところもあると思いますね。任せていけば、低きに流れます。見ていたら、楽な方に行きますよ。どうぞお好きなように、好きなように決めて下さいって言ったらね、そりゃあ10年経っても20年経っても何も生まれてこないと思います。それはもうちょっと先にいって、例えば環境の話で、本当にこれはヤバイぞと多くの人が、思いだした時は動くかもしれないけど、今ももう相当ヤバイんだけども、まだ余裕があると思っている人が多いわけでね、実は。何とかなるわと。そういう状況でほうっていても、動かないですよね。だからそれで、そういうような状況で、例えば日本全国で教員から盛り上がって、学校をあげて環境教育をやっている所があるかと、あれば挙げてほしいと自分思うんですね。やっているのはせいぜい、いろんなところで調べていますが、学校をあげてやっている所はあることはありますが、それは非常に小さい学校ですよ。全校 20 名ぐらいとか、嘉陽小学校とかね、そういうのがあります、全国でも。でも、大きな、中規模校、大きな学校になると、やっているのはせいぜいよくて学年。普通でやっている所はクラス単位です。それはおそらく校長がやりなさいと言った所ではないと思います。そういう先生が、たまたま好きな人がいて、やっている所です。例えば、近隣の長嶺中学校は校長がやれと言ったわけじゃないんです。その技術の非常に優れた先生がいて、非常に苦労しながら学年まとめあげたわけですよ。それでやっているわけです。非常に稀です、日本全国でも。だから、なかなかね、どうぞご自由にということでいくと、環境教育の合意形成ができてやるというのは当分は出ないだろうと、自分は読んでいます。そういうものをやろうと、こう話し合って出てきたら、例えば環境教育であれば校長は止めないと思いますよ。今の世の中。ましてや教育委員会も文部科学省も止めるわけはないですよ。私なんかもう行政から、校長面談を受ける時は、環境教育は是非続けて下さいと言われています。沖縄県教育委員会の方針にも環境教育の推進っていう、こうバッチリ打たれているんです。だから、行政が止めることはないです。先生達が盛り上がったら、どうぞっていきますね、行政は。そういう状況であります。どうぞっていう状態は以前から実はできているんですよ。任していたら、やっぱり動かないです。

島袋：では横山さんが最初自ら率先して導入して、環境教育やろうとリーダシップを発揮したと

いう話でしたけど、次は先生達が環境教育を引き受けて、3 年も経って自分達の中で、環境教育はやるべきだっていうことが、ちゃんと分かっていて、そして自分達の中でも、これをやらなければいけないっていう意識が、主体者意識が出てきて、職員会の中でそういったことに関して話し合う雰囲気というか、そういった方向性が見えてくれば、例えば横山さんが次どこか別の学校に異動されても、職員会の中でそういった話し合いの場を設けて、そういった雰囲気がつくれたら、もしかしたらずっと継続していく一つの、重要なポイントになるかというイメージがしたんですが、そういった雰囲気はどのような状況でしょう。

横山：まだまだだと思いますね。私が出たら少しは残るかもしれないけど、学校あげてっていうのは無くなると思います。学校ってそういうところです。いろんな学校改革やった校長達もいくらかいますが、その人が出たら終わりです。何の分野ででもですよ。環境であろうが、何であろうが。学校ってそんなところです。まして、情熱っていうのは引継ぐことはできないです。全国を見ても、校長が変われば学校は変わります。こういう議論もあります。次の人が来ても継続できるようにするのが、今いる人の仕事だと言う人がいるんです。自分から言わせれば、そこまで責任はもてない。次来た人がやりなさい。行政が次も継続させたいならそういう人をもってきなさい。それは私の責任じゃないと、これははっきり言います。そんな、3 年、4 年で何年も続くようなものは、そんなにできるもんじゃないですよ。組織ってそういうふうには動かないと自分見ています。

学生：校長先生同士で情熱を共有できたら、次の方が来ても続いたりするんじゃないかなって今思ったんですが、校長先生同士で話をする機会っていうのはないんですか。

横山：実は小禄地区校長会っていうのが月 1 回開かれていて、我々の自主的な会合ですけどね。小学校 7 校と中学校 3 校が小禄地区あります。そこで時々、環境の話をしますけど、それじゃあうちの学校でもやっていこう、という人はまだ現れないですね。こういう一般的にはやっていないことを新しく学校で始めるということは大変なことだっていうのが、叩き上げの先生達は分かっているんですよ。要するに職員会議ですよ。全校あげてやりましょうって言ったらね、自分では説得できないと思っているはず。それぐらい全校で何かを、普通やってないことをこの同じベクトルを向かせるっていうのは大変なことです。戦いですよ。それは、大変なことになるっていうのは校長先生達分かっているわけですよ、30 年も 40 年も教員やっている人達は。学校っていうのは結構、足の引っ張り合いですよ。いいことをした人は足を引っ張られるし、教員になったら分かる。組織はそんなもんですよ。「2：6：2 の原則」ってあるんですよ。2 がどうしようもないやつ、6 は普通、残りの 2 は素晴らしい人。その中の葛藤で進んでいるんですよ、組織っていうのは。世の中そうですよ。おもしろいことにサルの集団がいてね、8：2 でもいいです。2 の問題のあるサルがいると。8 はまぁまぁ普通か、ちょっとまとも。この問題のある 2 割のサルを除くと 8 が残るでしょ。この 8 の中のまた 2 割が問題行動になってくるんですよ。サルは。人間もおそらくそうだろうと学者達が言っている。おもしろいの、組織は、2 は、問題のある 2 を除いたら全部よくなるかと思ったら、そうじゃない。また 2 が現れる。

島袋：はい。他にありますか。

学生：何でどうしようもない2割のサルが出てきちゃうんでしょう。今の組織のなんかこう、どうしようもない2割の人を抜かしてあとの8の中でもまた2の人が出るんですよね。何故ですか。

横山：何でなんだろうね。よく分からないけど。事実がそうなっているようですよ。

島袋：では、地域の問題、地域との関わりについて聞いてほしいんですが。特に行政との関わりを含めまして、ないですか。はい、お願いします。

学生：先ほど話していたのと繋がりもあるのですが、他の地域にこういう環境教育を普及させていくにはどうすればいい、とかいう考えはおもちになられていますか。

横山：大きなところから言えば、環境教育を法律で、義務化してしまう。要するにこれは夢物語ではないわけです。やっている国もあるわけですよ、事実。それが大きなところで、大きく動く方法かなと思います。あとは長田さんも私達も他の NPO の人達もやっているように、それぞれの持ち場で一個一個、こういう地道な事実を創りあげていくしかないと思います。他に何かやりようがあるのかなと思いますけど。やるかやらないかの話だと思いますよ。私も行政に 22 年間いて、環境教育っていうのは非常に重要だと分かったわけですよ。重要だ、重要だ、と言っても、これ進まないわけです。だったら重要と思っている奴が、言っている奴がやれと思うわけよ。あなたがやれと。それで私はやると。重要だと言っているから、やると言って 55 名の難関の試験も受けて校長になったわけですよ、やっているわけよ、今。だから、本人がやるしかないと思う。この身近な世界では。大きなところでは、国として動いてもらわんといかんのだけど。

島袋：教育委員会のほうでは環境教育について取り組むべきだ、というにも関わらず、総合学習の中では環境教育っていうことをその予算的に措置しない、それから国際理解教育というなのもとに英語に力を入れる、予算もつけるという状況でしょうか。那覇市の市長側の価値判断は環境教育にかなり力入れているとすれば、予算面での配慮がないことは話がずれてるような気がするんですが、これはどうしてでしょうか。

横山：行政と教育委員会の基本的な関係もあると思います。行政は、教育の内容について関与できないんですよ。つまり、してはいかんですよね。そういうこともあって、やってほしいとは行政のほうは思っているはずですが、なかなか手が出せないと、いうことかなと思います。

島袋：他に質問ありますか。また私の方から。地域の方々が、「アースの会」というのをつくって、講演会とかいろんな活動をやりだしたと聞きました。非常に地域の素晴らしいことですが、さらに最近よくあるのは和田中学校の「地域本部」ですとか、あるいは京都や東京周辺で多い地域運営協議会方式の学校をつくり、それによって、実際そういった学校区レベルの地域住民組織が学校の授業を担当するようになっています。ようするに PTA アースの会がさらに成長すれば、

那覇市リサイクルプラザにある本物の「アースの会」のような、しっかりとした NPO 組織に頑張って、大きくなっていって、実際にその小学校区レベルの NPO が力をつけて、実際の地域の授業を担当する、あるいは支援できるということです。そこまでこなければ、宇栄原小学校から他の学校に普及させようにも宇栄原だけで手一杯で人材がもういなくて、現在の NPO だけでは普及できないということです。学校区内の授業を担当できる力のある NPO ができないと思うんですよ。だから、その学校を支える学校区レベルの、地域住民による組織の育成ですね。そしてさらにそれの住民ネットワークを、学校の授業にも取り組んでいく。だから、先生方が力を入れたらもう NPO は学校で授業やらなくなっていいよということではなく、常にその地域の方々が学校に入っていくというシステムが必要。あるいは地域の方々が学校の経営に関わっていくということですね。最終的にそれを目指していけば、法令で、トップダウンで、環境教育を義務化しなくても、地域が常にその環境教育を重視するような価値観を持っていれば、継続していくのではないかということについてはどうですか。

横山：スウェーデンの例を挙げると分かりやすいと思うんですけどね、スウェーデンは 40 年ぐらい前から環境教育が始まっているんですね。誰がやっているかっていったら NPO です NPO の人達が環境教育を始めて、沖縄で言えば「キジムナーと遊ぼう」みたいな環境教育があって、3歳児ぐらいから森に行って遊ぶ環境教育があるんですね。1週間に1回は、1日中、日中森の中で遊ぶわけですけども、これは雨が降ろうが雪が降ろうが行っています。そういう自然に親しむ教育がずっと 40 年前からあって、それから NPO の環境教育を受けた人達がドーっとこう育ってきて、大人になって、賢い消費者になって、その人達が今のスウェーデンの環境政策を支えているんですが。まずは、そういう市民層の環境教育があって、それがずっと継続されて国が動いて、環境教育が小学校で義務化されたわけです。だから、おっしゃるようにこの地域の人達が成長していって NPO になって、環境教育をずっと継続していく。これがいろんな所で、全国的に出てくれば、国は動かざるをえないなと思うんです。本当にそこまでいくのだろうかというのもあるわけで、何年かかるんだろうかというのもあるんですね。確かに現在 PTA アースの会の人達が NPO 化していく可能性もあると思いますが、その可能性も低いかなとも、今見ていますが。実は、良さん達 NPO も最初は普通の主婦の集まりだったんですね。リサイクル運動市民の会が、リサイクルプラザの運営の委託の話がきて、市民層に呼びかけてグループをつくったのがアースの会の始まりだったかと思うんですね。最初は古我知さん達の中で、成長していったわけです。そこから成長して、自分達でアースの会というのをつくって、今に至っています。出方から見ると、同じようなものですね。PTA のほうで言うと、少し違うところを言えば、子どもの保護者である。PTA にはいろんな部会があるので、宇栄原では環境ができ、アースの会という。そこでやってみようか、という人がこう入ってくるわけです。1年か 2 年すれば、要するに他の部に移ったり、お役ごめんでしょ、という人も多いわけです。例えばアースの会宮良さん達にすると、NPO のみなさんからの呼びかけがあって、参加した人達ですが、かなり強い興味があって参加してきたわけですよね。その人達が勉強して発展してきたということなんで、そのへんで PTA アースの会がどこまで成長するか、ひょっとしたら子どもが卒業したら終わりなのかなと思うところもあります。今思うのは、ケチャップのビンありますね、ケチャップのビン。ケチャップのビンのやつは、ケチャップを出すのにちょっと時間かかるでしょ。それで、振っているうちに、ケチャッ

プってドバッて出るんですよ。これ「ケチャップ現象」って言うんですね。今ね、ひょっとしたら環境関係では、ドバッと出る直前かなというふうに見ているんです。なかなか出ない、振ってるけど、長田さん達も頑張っているけど出ないですよ。でもね、もうちょっとしたらドバッと出てね、世の中一気に変わるおそれはあるなと見ているんです。先週だったか、月曜日に県議の國場幸之助さんと那覇市議の上原栄作さんが「えいちゃん・えいさくのタックルトーク」とかっていうのを、浦添のコミュニティラジオでやっているんですね。そこに呼ばれて１時間一緒に話したんですけども。かなりいろんな人達が環境に興味持ってきているなと思ったんですね。例えばこないだゴアさんが呼びかけた世界的なイベントとか、若い人達も環境に取り組むことがカッコいいんだと、そういうライフスタイルもどんどん出てきているわけで。かなり世界的に人が動いているんで、ひょっとしたら、ドバッと出る直前かなと思っています。出たら早いなと思っているんですけど。どうなんでしょうかね、そういうことも感じます。

島袋：では、次週は今までは自分達がその気づいたこと・分かったこと、それから分からなかったこと、それを仕分けして、そして情報共有しあう・認識を共有しあうっていうワークショップにくわえ、今度のワークショップは関係図まで、画にするまでやってみたいと思います。

そして、8月3日、1週間ずれてしまったのですが、8月3日にはグループのプレゼンテーションをやってもらいたいと思います。それで今まで来られたNPOの方々、それから横山さんも含めて、是非参加して下さいという声かけをする予定です。そして研究スタッフの方々も来ていただいて、みんなでまたいろいろこの授業で分かったこと、さらに疑問に思ったこととか、いろんな問題があるとは思うんですけど、それを共有したいと思います。今日は本当に横山さん、長い時間ありがとうございます。では、最後に拍手で。